

# 令和元年度 横浜市世界を目指す若者応援事業

## (個人留学による帰国報告)

### ●氏名

S.Yさん

### ●留学先

国/都市：アメリカ合衆国/ベッテンドーフ（アイオワ州）、モリン（イリノイ州）

外国の高校：Quad Cities Christian School

### ●留学期間

2019年8月9日～2020年3月28日

### ●留学先での活動、留学で学んだこと

#### 【位置】

アメリカ中央部アイオワ州とイリノイ州の境界に、ミシシッピ川を挟んでアイオワ州の二の街（ベッテンドーフ、ダavenport）、イリノイ州の三つの街（モリン、イーストモリン、ロックアイランド）計5つの街から成り立つQuad Citiesという中規模の都市があります。私は、そのQuad Citiesの一部であるベッテンドーフという街で7カ月間生活しました。私の学校はイリノイ州のモリンという街にあり、毎日車でイリノイ州へ橋を渡って投稿しました。Quad Citiesは、初めてミシシッピ川を渡る鉄道用の橋が作られた場所として知られています。



#### 【ホストファミリー】

ホストマザー、ホストシスター、ホストブラザー。シングルマザー家庭のため、日常生活では、お皿洗い、家の片付けなどは子供達の仕事で、ホストシスターと手分け

して行いました。

・学校について (Quad Cities Christian School)

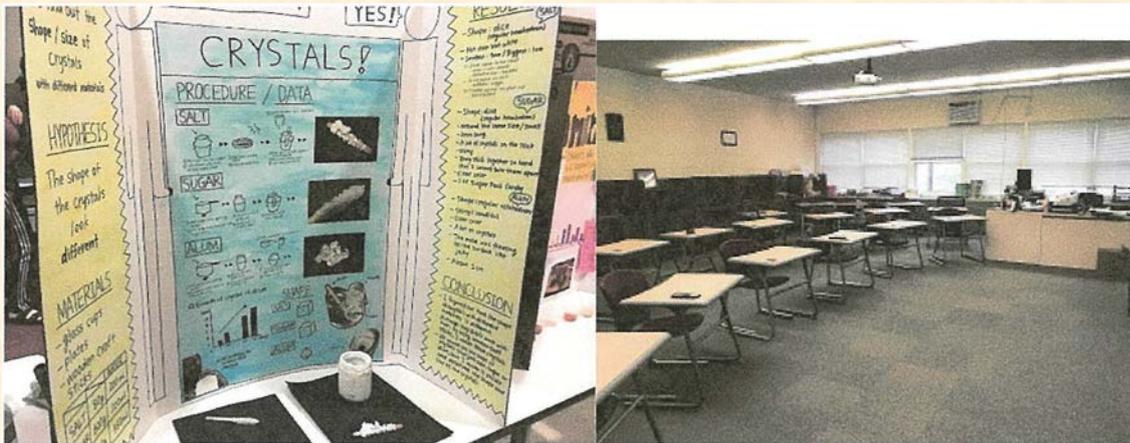
- ・私立、キリスト教
- ・高校と中学校が合体
- ・6学年で100人以下の小さな学校
- ・一本の廊下に約8個の教室

#### 【学業】

アメリカのクラスでは、皆が積極的に授業に臨む姿が目立ちました。多くの生徒が挙手をして質問に答え、聖書のクラスでは生徒からの質問から成り立つ授業の日もありました。英語と世界史のクラスの課題や授業に一番苦労しました。留學生活の初めの方は、私のリスニング力が弱く、先生の言っていることが聞き取れないことがあり、どの課題をやらなくてはいけないか分からず苦労したこともありました。しかし、日本と比べて一人の先生に対しての生徒数がとても少なかったため、先生方から手厚いご指導を頂くことができました。成績はグレードリンクというアプリで常に確認できるようなシステムでした。テストのみならず宿題や授業なども先生が成績を付け、随時アプリに100%を満点 (A+)として自分の成績が記載されていました。日本とは違い、毎日確認できたのでモチベーションの向上にも繋がりました。また、エキストラクレジットという課題や問題があり、正解すればプラスのポイントが貰えるという仕組みもあり100%以上の成績をとることも可能でした。

レベルに応じて自分の取りたいクラスを選ぶことができるのはアメリカの高校の学業の魅力だと思います。アメリカと日本の高校の数学の進度には違いがあり、日本の高校よりも簡単でした。数学のクラスでは、計算機を使うことが可能だったので初めは驚きました。第二セメスターには、スピーチクラスをとりました。英語が第二言語である私にとっては挑戦で不安でしたが自分の英語力、独創性を使って楽しんで受けることが出来ました。三月の初旬には理科をとっている生徒がサイエンスフェアプロジェクトを行い、実験をしてボードを作って、学校の体育館でサイエンスフェアを行いました。多くの方が、私の作ったボードの前に集まり興味深く話を聞いてくださりました。各シーズンスポーツの後には学業成績が一定以上の生徒が貰える賞を頂くこ

とが出来ました。



↑サイエンスフェアのために作ったボード    ↑数学の教室

### 【学校生活】

時間割はほぼ毎日同じで、43分の授業が8コマとランチが45分間ありました。休み時間は3分と短いのですが、質問などで次の授業に遅れた場合はクラスパスを貰うことができ、遅刻とはみなされません。トイレは授業中でも気軽に行く生徒が多く、先生も寛容です。時間割の中にはスタディーホールという自習をする時間があり、スタディーホールがある事で、学校が終わる前までに宿題を終わらせてしまい、教科書を自宅に持ち帰らない生徒が多くいました。

### 【シーズンスポーツ】

秋にバレーボールチーム、冬にバスケットボールチーム、春にサッカーチーム（コロナウィルスの為二週間ほどで中断）に所属しました。日本の高校では、テニス部に所属していたので、他のスポーツをすることは私にとって挑戦でした。スポーツは数学と同様に世界共通なので、英語でのコミュニケーション力が未熟だった私でもスポーツを通して友達を作ることが出来ました。シーズンが終わった後も日常生活で友達関係を継続させることが出来、挑戦して良かったです。バスケットボールシーズンでは、テニスでのフットワークを生かしたディフェンスから、シーズン後にディフェンス賞を頂きました。また、チームとしては、NICC (Northern Illinois Christian Conference) トーナメントで二位を獲得することが出来、多くの試合を通してコミュ

ニケーションと互いに協力し合う事の大切さを実感しました。私が挑戦した三つのスポーツは全てチームスポーツで、それを通して多くのことを学びました。各スポーツのシーズン中には Pizza Ranch Fundraiser というイベントがあり、チームの活動費を集めるために Pizza Ranch という地元のピザ屋さんで男女両チームがサービスをしてそこでお客さんがくださったチップの代金を競います。お店の入り口にチップを入れる箱があり、少しでも多くチップを入れてもらえるように皆で良いサービスをするよう頑張りました。バレーボールのシーズンは女子が勝ち、罰ゲームとして男子のサッカーチームにパイをなげました。バスケットボールのシーズンは女子が負け、パイ投げを全校生徒の前で受けました。



↑バスケットボールの試合前の様子

#### 【学校内での活動】

私は、新聞クラブ、インターアクトクラブ、生徒会に入っていました。新聞クラブの一員として、月に一度、校内新聞を発行するための記事を書きました。日本特に横浜について知ってもらいたいと思い、お正月と横浜についての記事を書き、生徒に私の国について知ってもらうため努力しました。10月の発行新聞では独創的な内容の記事ということで、最優秀記事 (Best Article) 賞を頂きました。

インターアクトクラブでは、学校内で生徒が楽しめるゲームを考え行いました。また、春休み期間に行われたペルーへのミッショントリップ（私は参加しませんでした、学校から6人の生徒が参加しました）のお金を集めるために、生徒からの寄付を募る企画をクラブのメンバーで考え実行しました。他にも、クリスマスのシーズンには Angel Tree という教会が行ったプロジェクトに加わりました。このプロジェクトは、親にお金の余裕がないためクリスマスプレゼントを貰うことが出来

ない子供たちのために、子供の希望に沿ったクリスマスプレゼントをあげるというものです。そのような子供たちを少しでも減らしたいと思うきっかけとなりました。

生徒会では、学校で行われた献血の前に献血をしてくださる方を見つける仕事をしました。10月頃にはStudent Hunger Drive というプロジェクトにQuad Citiesにある多くの学校と共に参加しました。このプロジェクトは、リバーバンド・フードバンクという会社が、食べ物が十分でない人達のために、缶詰を集めて寄付する活動をしており、その活動に基づき、期間中に各学校に生徒が多くの缶詰を持ち込み、最終的にフードバンクに寄付し食べ物がいない人々に寄付するというプロジェクトです。このプロジェクトの開会式では、合唱団の一員として、Hunger Drive Skitをダンスと曲で披露しました。



↑ Student Hunger Drive開会式会場

↑ Student Hunger Drive skit

惜しくも負けてしまいましたが、優勝した学校には大手スーパーマーケットから、その学校の集めた数として数えられる、沢山の缶詰の寄付がありました。集める期間が終了したのち、各校の缶詰の数の統計がでて一番多くの食べ物を寄付した学校を知ることが出来ました。このフードバンクがサービスする地域では8人に1人、子供においては5人に1人が十分な食事をとることが出来ていないという現状を少しでも変えたいと思い、私も沢山のインスタントラーメンを寄付しました。生徒会では、生徒が持ってきた缶詰などを箱詰めする仕事を担いました。

## 【学校外での活動】

Student Hunger Drive、Angel tree プロジェクトを通して、貧困に苦しんでいる大人や子供を助けたいと思う気持ちがめばえていた頃、クリスマスの時期に私がホストファミリーと通っていた教会で“Christmas Shoe Box”というプロジェクトがありました。これは、クリスマスプレゼントを貰うことができない子供たちに、靴箱にプレゼントを詰めて送るというものです。年齢や性別ごとに推奨されているものは違いましたが、私は5-9歳くらいの女の子というカテゴリーを選び、ヘアブラシや可愛いクマの人形などを箱いっぱい詰めて寄付しました。インスタグラム上では、クリスマス後に実際にプレゼントを受けとった多くの子供たちの喜びに満ち溢れた様子が掲載されていて、幸せな気持ちになりました。

現地の学校にはテニスチームがありませんでしたが、家の近くにテニススクールがあり、そこに通うことが出来ました。幸せなことに、コーチがテニスの奨学金をとってくださり無償で大好きなテニスを週に一回プレーすることが出来ました。

さらには、ダavenportの施設で行われたハワイアンイベントでのコートチェックを学校の先生からの紹介で行いました。パーティーへの参加者がパーティーに参加している間に預けたコートを管理する仕事です。コートを預けるのに決まったお金が必要なのではなくチップを入れる箱があり、任意でチップを払う仕組みになっています。コートチェック担当をするまではこの仕事について全く知りませんでしたが、どんなことにも裏で何かをしている人がいるということを知ることが出来ました。また、教会でのパンケーキの朝食イベントにボランティアとして行き、パンケーキを作りサービスしました。人の役に立っているという感覚を感じ嬉しく思いました。



↑コートチェック用の空のラック（イベント前） ↑多くの人がコートを預けてくれました



↑ 沢山の女の子向けの小物を準備して写真右の箱1つに詰め寄付しました

### 【他の留学生との交流】

私が通っていた高校には、私を含め7人（中国人2人、タイ人1人、モンゴル人1人、日本人2人、ブラジル人1人）の留学生、2人（モザンビーク出身、タンザニア出身）のインターナショナルスチューデントがいました。留学生活中大変なことは多くありましたが、留学生同士で協力し助け合いました。大半はアジアの国からの留学生で、彼らの国についても知ることが出来、色々な国に興味を持ちました。私はアジア人ですがアジアの国でも知らないことが沢山ある事に気づかされました。

（高校の体育館には過去に受け入れた留学生の母国の国旗が飾られていました。）

また、アイオワ州の東部にステイしている同じ留学団体（YFU）の留学生の集まりでは、フランス、ドイツ、イタリアなどのヨーロッパ出身の留学生とも交流でき、ヨーロッパについて知ることが出来たり、アメリカでの学校生活について話を共有できたりしました。日本人留学生のみならず、他の国からの留学生の友達とも留学中や留学後も連絡を多く取り合い、世界中に友達ができました。

### 【日本紹介】

先ほども述べたように、新聞クラブで日本のお正月や横浜についての記事を書きました。また、日本の両親に日本食を送ってもらい、友達やホストファミリーに日本食を紹介しました。友達との会話の中で、日本の高校の様子、食生活、行事などについて話すこともありました。

## YOKOHAMA -

A breathtaking wonderful city... What about it? Everything! The food, the views, the history, the art. What is the name of the city?

YOKOHAMA!!! YOKO... what?

Yokohama is in Kanagawa Prefecture, which is below Tokyo. Imagine 4 million people in this city that faces the sea... a city where an urban and historical mix live together.

During the day, you can enjoy learning about its history.

**1) Cupnoodles Museum:** This is the museum of Momofuku Andou, who invented the first instant ramen noodles! You can make your own cup of noodles there!

**2) Ehrismann Residence:** This is the home of Mr. Ehrismann, a Swiss man who

moved to Yokohama for the silk trade as a company manager. There are many western-style houses nearby.

**3) Yokohama Red Brick Warehouse:** This was constructed 100 years ago. Now, it's changed to a cultural and commercial facility.

Once it gets dark, the face of the city completely changes into its urban view. The combination of the sea and many unique shapes of buildings create impressive night views. Even historical buildings change their outfit at night. The stars in the big sky, decorative illuminations, the light of cars, and the window lights all paint a breathtaking night view that fascinates people from all around the world. This is the picturesque Yokohama, both historical and urban as you spend time with the people who are important you!

↑ 横浜を紹介する新聞記事を書きました

### 【宗教・教会について】

アメリカには多くの宗教がありますが、キリスト教といえばプロテスタントが主流です。アメリカで私の通っていた学校がキリスト教の学校、ホストファミリーもキリスト教を信仰していたことから、キリスト教と密接した生活を送っていました。教会に行く家庭は、それぞれ自分のホーム教会というところがあり、毎週日曜日は教会に行きます。私がホストファミリーと行っていた教会は小規模でしたがそこに行く人びとの関係は深かったため、学校のみならず教会でも知り合いが多くできました。

教会では、子供を預ける場所がありそのベビーシッターとしてボランティアをしました。私は子供と接する事が好きだったので、多くの子供と関わりとても楽しかったです。

クリスマスには、隣接するモールでイブの日に働いている従業員の方々に菓子や果物をあげるという活動も行い、彼らの喜ぶ姿をみて私も良い気持ちになり

ました。

学校では毎週水曜日にチャペルという時間があり、毎週異なる牧師さんが来てお話をしてくださります。牧師さんのお話の前には、聖歌隊 (worship team) がキリスト教の歌をギターと共に歌います。この聖歌隊 (worship team) は週に一回ある自由選択の科目としてあるもので私もその一員でした。何も考えずに入ったので全校生徒の前で歌うなど想像もしていませんでしたが、楽しむことができ挑戦してよかったと思いました。

聖書の授業は全校生徒の必須科目として存在していて、聖書について学びました。聖書独特の英単語に苦労しましたが、日数を重ねるうちになれることが出来、キリスト教についても多く学ぶことが出来ました。



↑ クリスマスイブには教会と隣接するモールで働く従業員にフルーツやお菓子を配りました。



↑ 教会でベビーシッターをした 部屋の壁にかかれた文字

## 【コロナウイルスについて】

3月の半ば頃にイリノイ州がコロナウイルスの拡大防止のため全ての学校を2週間閉鎖するよう命令を出し、サッカーチームの練習も中止となりました。私の留学団体（YFU）から学校が四週間以上閉鎖された場合、留学プログラムがキャンセルになるとの連絡がありましたが、イリノイ州の学校が閉鎖されることが決定した4日後に留学団体のすべてのプログラムが中止になり強制帰国になることが決まりました。私の学校は春休み中だったので、多くの友達には直接挨拶をすることが出来ず、また、残り三カ月をアメリカで過ごさずに日本に帰国しなければいけないやるせなさを感じました。その一週間弱後にはイリノイ州がロックダウンに入り、友達やホストグラウンドマザーやグランドファザーとも全く会えない状況になってしまいました。私が住んでいた、アイオワ州側はロックダウンをしていませんでしたが、アイオワ州にある全ての学校が1カ月閉鎖されることになりました。

両州共に飲食店はテイクアウトのみになり飲食店の中はしんみりとしていました。ロックダウンの命令後は必要不可欠な仕事での外出、スーパーへの買い物、犬の散歩以外は外出することを禁止され、家族以外の2人以上の集会も禁止されたので教会もオンラインになりました。ある日ホストシスターとショッピングモールに行きましたが、多くの洋服屋は閉まっていて人も少なく静まり返っていました。スーパーマーケットでは多くの人がトイレトペーパーや水、食べ物を購入するために殺到し、空の棚が多く見受けられました。日に日にコロナウイルスへの感染者が増えていく中、帰国フライトの連絡が留学団体からなかなか来ず不安な毎日を過ごしていましたが、3月28日に無事に日本に帰国することが出来ました。幸いだったことに、私の留学中、近くの地域にはコロナウイルスに感染した人はいませんでした。

日本の空港に到着した後は、検疫があり調査票を記入したのち係員の説明を受け2週間の自宅待機への同意書にサインをしました。全ての人が入国検疫を通過しなければいけなかったため、時間がかかりました。機内では大半の人がマスクを着用していてコロナウイルスの深刻さを身に染みて感じました。人によってはシートベルトなどすべてのものを除菌シートで拭いていました。

## 【将来について】

留学に行く前はアメリカの政治について知りたいと思っていましたが、学校での Hunger Drive やクリスマスの時期のプロジェクト、教会でのベビーシッターを通して、貧しい子供たちを少しでも助けることが出来る仕事をしたいと思うようになりました。子供と接する事が好きなので、お金がないために十分な教育を得られない子供が十分な教育を受けられる機会を提供できるような仕事をしたいです。留学中に得た積極性を活かし、ボランティア活動もしたいです。また、多くの国からの留学生と友達になったことから、世界の事をもっと知り、旅行したいと思いました。自分の海外への興味と貧困問題への興味をつなげたいです。

さらには、この留学を通して多くの高校生に留学をしてもらいたいと思いました。自分の経験をもとに留学に行きたい高校生に留学の魅力を発信したいです。

そして、英語で意思疎通ができるという強みを使って、日本を訪れる外国人観光客を助けてあげたいです。また、英語だけではなくほかの言語も学んでみたいと思います。

## 【留学を通して】

留学に行く前は、積極性が足りず他人の目を気にして本当の自分を出せないことが多かった私ですが、7カ月のアメリカ生活を通して積極性、失敗を恐れずに挑戦することの大切さを身にしみて感じました。自分の英語力が未熟でも積極的に友達に話しかけたり先生に質問に行ったり、主体的に行動したことによって私の留学をより良いものにしてくれた多くの良い友達、先生を得ることが出来ました。また、ホストファミリーに積極的に自分から話しかけたことによって深い信頼関係を築くことが出来ました。

例えある事について何も知らなくても“とりあえず試してみよう”という気持ちを持ち、勇気をもって行動したからこそ、失敗したとしても“やらなかったよりはましだし、失敗したけどこういういいことはあった”というように、自分でも想像してなかった新たな側面を見ることが出来たのではないかと思います。

見ず知らずの事に直面した時、“楽しそうだからやってみよう”と思うか、“失敗したらどうしよう”と思うかは自分次第であり、毎回何かに挑戦しようと思ったときは、ためらう気持ちもあり心の中で葛藤したこともありました。不安を捨てて挑戦したことによって、自分の全く知らないことに直面した時にわくわくする様になりました。留学中は何もかもが初めてで不安に感じたこともうまくいかないことも多くありましたが、今までの固定観念をすべて捨て新しい視線で、新しい人たちとの生活を通してより自分の好きなことは何か、なにが自分の魅力なのかを探ることが出来ました。多くの人種が集まるアメリカでの生活から、みな人それぞれ個性がありその個性を互いに尊重しあうことでよい社会が生まれることにも気が付きました。アメリカと日本は全く違いアメリカに来てから、日本そして日本にいた時の私を客観的に見る事が出来、多くの興味深い発見をすることが出来ました。また、ホームステイを通して親のいない生活を通して責任感と精神的自立を手に入れることが出来たと思います。7か月家族と離れて暮らし、いかに日本にいた時母が全てをやってきていたのか、任せてしまっていたのかということを実感し、日常的に家事を母に任せずに自分の仕事だという意識をもって生活しなければいけないと思いました。

どんなに辛くても常に笑顔でいれば自分のみならず周りの人も幸せにできるということも分かりました。渡米前は、私は英語に自信がありませんでしたが、友達と英語で話したいという一心で自信をもって英語とにかく沢山を使ったら友達とコミュニケーションをとることが出来、友達に上達したと言われた時はとても嬉しく、努力してよかったと思いました。諦めないで努力し続けることは本当に大切です。日本にいと英語は勉強をするものと思いがちですが、留学をへて英語は楽しむものだと気づきました。

#### 【最後に】

私の留学生活は私一人だけでやりきることが出来たのではなく、多くの方が支えてくださったことによりとても濃い留学生活を送ることが出来ました。コロナウィルスの影響で早期帰国となってしまいましたが、沢山の事を吸収することが出来、7カ月だけでも留学することが出来たことにとても感謝しています。普段

自分の事を陰で支えてくれている方々の事を忘れ、自分の事に夢中になってしま  
うことが多いですが、留学を通して、どれだけ家族、友達、先生、その他の方々  
が私の事を助けてくれて応援してくれていたのかを改めて知ることが出来まし  
た。私の留学を支援してくださった横浜市の方々、本当にありがとうございました。  
た。